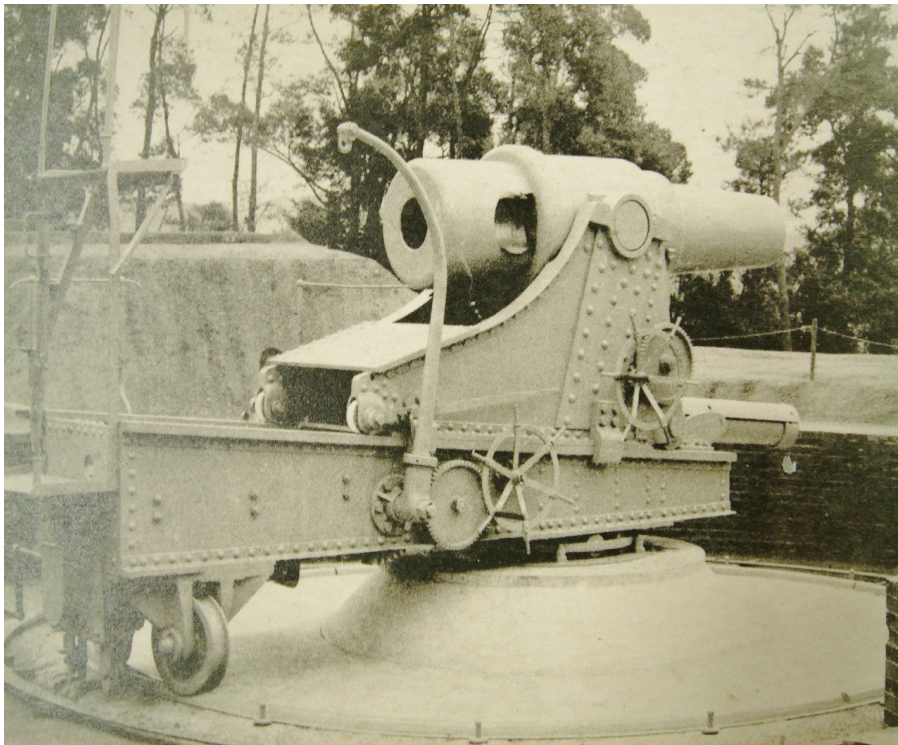




亀山砲台えはがき（文書館図書726-58（51））



「音」で読み解く
防長の歴史

♪ 7

歴史ノオト⑦

近代山口をいどった「亀山砲台」の音

【近代日本の象徴「富国強兵」】

「明治三十七八年の戦役」、つまり日露戦争におけるかたちのうえでの不明瞭な勝利は、明治国家の「強い国」への想いの到達点ともいえるものでした。従軍戦没兵士の慰霊鎮魂とあわせて、戦争の勝利を印象づけるために砲弾や砲台などが「戦利品」として飾り立てられたり、記念碑が築かれたりしました。それは、外交上の薄氷の勝利を重厚なものに見せかけるための視覚的な操作でもありました。

山口においても維新期の藩主敬親や支藩主の銅像が建て並べられた聖なる丘「亀山」の西南端、平蓮寺山に「日露戦役記念標」として砲台が据え付けられました。

毛利家一門の主唱の下、桂太郎を総裁にいただいて設置事業は進められていきました。砲台を載せるマウンドを含め、公園の全体プラン作成を手がけたのは陸軍中将有坂成章です。岩国藩砲術士の嗣子として岩国藩日新隊に所属して鳥羽伏見の戦いに従軍しました。明治維新後は帝国陸軍造幣工廠に所属して、同じく岩国藩出身

の西田明則（東京湾海堡の設計者）とともに要塞築造に腕をふるいました。また、銃砲兵器開発者としてもその名を知られていました。日露戦争前半のハイライト「旅順要塞陥落」に際しては、彼の手になる「有坂砲」が大いにその威力を発揮したといわれています。

公園整備は、明治40年（1907）7月に起工、43年5月に完成、盛大な落成式が挙行されました。前方後円墳を彷彿とさせる形状の巨大なマウンドの中央くびれ部分に据え付けられたのは、日露戦争の旅順要塞攻防戦で日本軍の主力兵器として威力を発揮した「二十八糎（センチ）榴弾砲」でした。

亀山の砲台公園は、以後、山口名所の一つとなります。そして、時報として、毎日正午を告げる空砲が発せられたとか。近代に入って全国各地に築かれたこのような「時を告げる」場所は、「午砲台」とか「ドン山」と呼ばれました。時を告げるという意味では、明治以前の「山のお寺の鐘が鳴る～♪」の延長線上にもあるものといえます。実際にその音を体感したわけではありま



「亀山園の記」
（三坂圭治文庫 14）（昭和2年）

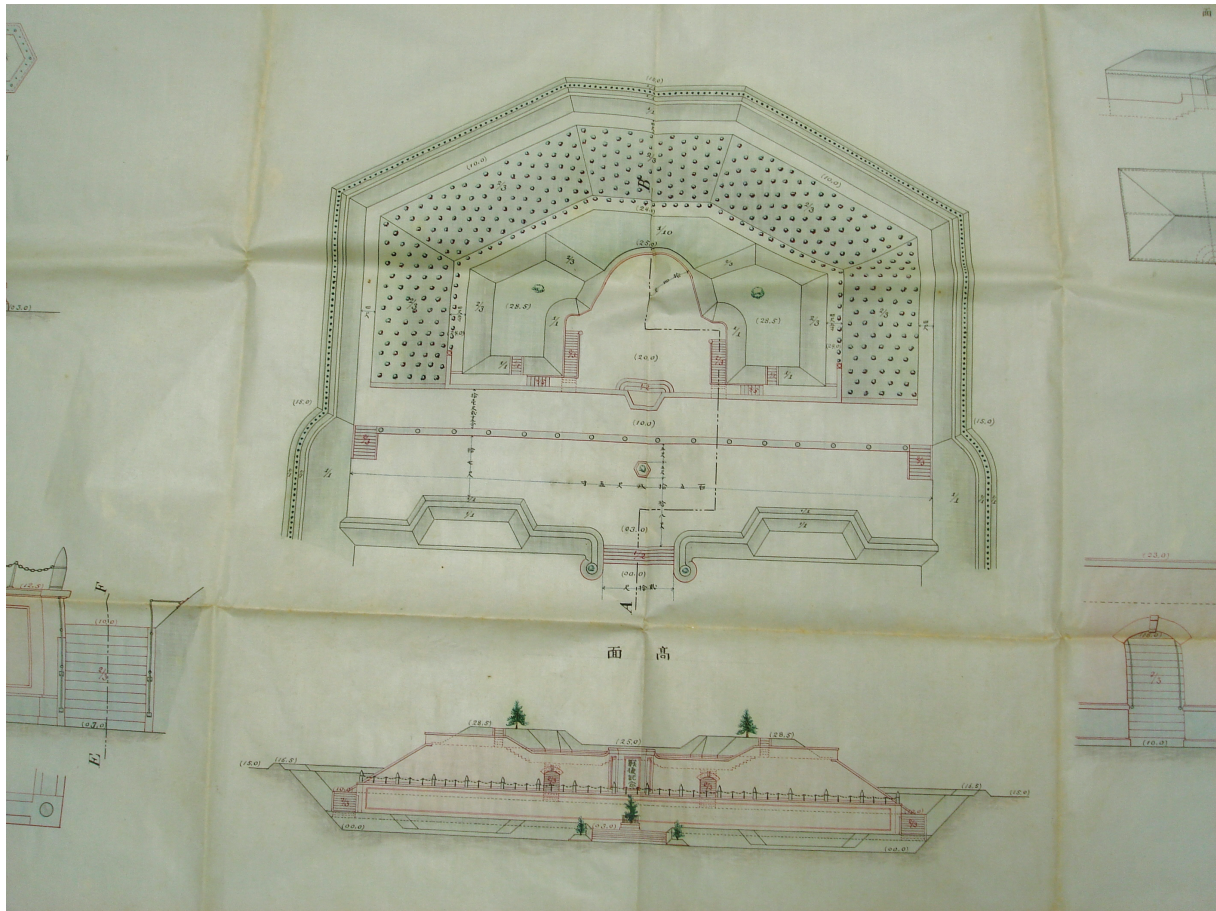
山口町長や山口教育博物館長をつとめた作間久吉によって記されたものです。

山口町の中央部に位置する亀山の山頂部には毛利家銅像が建ちならび、山全体の寄贈を受けた毛利家が亀山園保存会を組織して山口の聖地としてその維持管理にあたりました。

亀山山頂の銅像公園、香山園の毛利家墓所、野田御殿の東方背後に控えた野田神社豊栄神社を結ぶと、山口に明治維新をもたらした毛利敬親が形成した「聖なるトライアングル」が浮かび上がってきます。

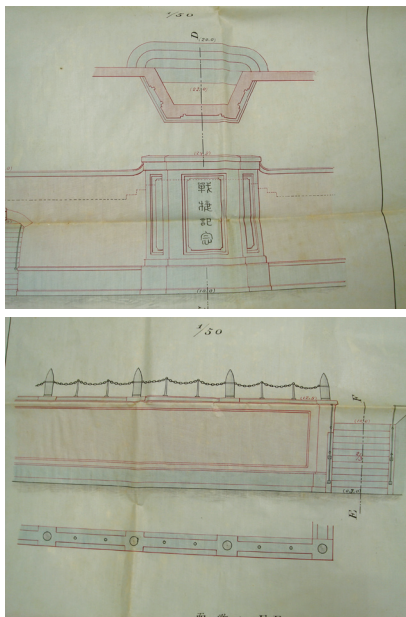
せんが、「近代的な、いかつい兵器から発せられ、轟きわたった大きな音」は新しい時代を実感させる装置として人々の耳目を惹きつけたものと思われます。

戦後になって、この場所にはサビエル記念聖堂が建てられました。再建されたサビエル記念聖堂の鐘の音は、今も山口にとってはなくてはならない音風景です。



「亀山砲台公園設計図」（毛利家文庫58絵図 996）

設計者である陸軍中将有坂成章から毛利家扶田島信夫に提出したもの



「亀山砲台公園設計図」
（毛利家文庫58絵図 996）

上 中央部「戦捷記念」のプレート
下「砲弾」を用いた囲柵



亀山砲台公園全景えはがき（文書館図書726-58（69））